

Title	上級日本事情授業報告
Author(s)	播磨, 涼子
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 2004, 2, p. 21-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4040
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

上級日本事情授業報告

播磨 涼子

【要旨】

日本事情の授業を選択する留学生は、「新聞がスラスラ読めるようになりたい」「ニュースを理解できるようになりたい」と言いながら、実際には、日常的に新聞やニュースに触れることは少ないという傾向がある。授業中の質問などから推察すると、それは決して怠け心によるものではないようである。では、生の情報にアクセスしようとする際に、何が彼らの障壁となるのか。本稿は、その障壁をできるだけなくすことを目的とした「上級日本事情（日本の時事問題）」の授業報告である。これまでに実際に行った何種類かの授業形態を報告すると共に、授業を行う上で生じたさまざまな問題点を明らかにする。また、教材として実際に使用した資料や授業中に紹介した書物などを列挙した上で、今後の課題や展望について述べるものとする。

はじめに

日本事情の授業を行うにあたって留意すべきことがある。それは、「新聞記事をスラスラ読めるようになりたい」と学習意欲を燃やす留学生が、実際には、あまり日常的にニュースを見たり、新聞を読んだりしてはいないという事実である。日本事情の授業を選択する留学生は、概して熱心であり、決して怠けているわけではない。にもかかわらず、ほとんどの留学生が、生の「日本事情」の情報にアクセスしないのはなぜなのか。何が彼らの障壁になっているのか。

第一に考えられるのは、新聞記事に使われる漢字が難しいということである。読み返すことで味わい深くなる文学作品と違い、新聞記事は毎日大量に読まなくてはならない。一説によると、朝刊1部は新書1冊に匹敵するらしいが、興味を引く記事を拾い読みするだけでも、毎日多くの漢字と格闘しなくてはならない。上級レベルになっても漢字が苦手な留学生にとっては、終わりのない「漢字マラソン」に参加するようなものである。

第二に考えられるのは、時事問題の専門用語が難しいということである。辞書を引いて漢字が読めたとしても、政治、経済、国際関係、科学などの専門用語として理解するのは、日本人にとっても至難の業である。カタカナ語を引き合いに出すまでもなく、新しい概念や新しい技術の言葉は、一般の辞書に載っていないことが多い。そこで、音読ができて理解が出来ない事態に陥るのである。

しかし、上述の2点は少し辛抱強く調べれば、かなりの部分を克服できるはずである。また、上級レベルまで達した留学生が、そのような手間暇を惜しむことも考えにくい。では、辞書では解決できない障壁とはどのようなものであろうか。

それは、「日本人なら特に説明するまでもなく知っていること」を、「日本で暮らしていなかったために知らない」ということだと思われる。たとえ、文法的にニュースや新聞記事を理解できたとしても、知識の蓄積がないために「なぜこの問題が今大きく取り上げられているのか」「ここに至るまでの流れはどうなっているのか」がわからないのである。社会的背景や歴史的背景は、辞書を引いて理解できることでも、1冊の書物を読んで理解できることでもない。

実際、授業中に留学生のニーズを問うてみたところ、「構文や語句説明など表面的なことよりも、問題の背景を知りたい」「もっと掘り下げて日本を理解したい」という熱心な声が多かった。「せっかくこの時期に日本に留学したのだから、この時期にしか学べないことをたくさん学びたい」という希望は、もったもなことである。このような留学生の要望にできるだけ応えるには、どのような「上級日本事情」の授業がいいのだろうか。以下、実際に行った授業形態報告すると同時に、問題点を明らかにし、今後の課題について述べるものとする。

1. 対象

上級日本事情の授業は、日本語・日本文化研修留学生（以下J）／研究留学生上級（以下RA）／短期留学生上級（以下MA）等日本語上級レベルの学生対象だが、毎回ほとんどの受講生はJコースの学生である。自国で、平均して3年ほど日本語学習歴があるが、話すことが得意な学生もいれば、書くことが得意な学生もいて、個別の日本語能力到達度は多少ばらつきがある。受講生の多くは、自国で日本語・日本文化を専攻しており、当然のことながら日本に対する関心が強い。授業名の『日本の時事問題』、つまり現代日本の問題に惹かれて受講する者がほとんどである。受講者数は、学期によって大きなばらつきがある。これまでのところ、最少受講者数は2名、最多受講者数は16名で、秋学期・春学期連続して受講する者も複数いる。

2. 授業のニーズ

既存のテキストは、初中級レベルの学習には役立つが、上級レベルの日本語・日本文化研修学生のニーズは満たしていないようである。開講時にクラスで実施するアンケートによると、日常のニュースなどできるだけ新しい「日本事情」を求める声が多い。つまり、テキストにおさまった時点で、彼らの望む「最新の情報」ではなく、「過去の情報」になってしまい、興味が半減してしまうのである。

では、彼らの考える「日本事情」とはどういうものか。もう少し具体的に各自興味のある分野をたずねると、政治・経済から日々の事件・事故に至るまでのさまざまな「現代日本社会の現象」や、日本人、特に留学生と同年代の日本人の間で流行っていることを含めた「若者文化」を挙げることが多い。

基本的に理系の学生がいないので、科学技術に関する興味は比較的少ないが、それでも、彼らのほとんどが来日直後に日本人学生と同じように携帯電話を持ち、メールのやりとりをすることを考えると、日常生活を営む上でも急速な科学の進歩を無視することはできない。最先端科学技術の用語は一般日本人にとっても難解なうえ、カタカナ語のままである場合も多い。また、そうした最新技術分野に限らず、最近多用される「カタカナ語」については、どの学生もかなり興味を持っているようである。

さらに、「世界における日本の立場」という観点から、国際的なニュースとそれに対する日本の対応などに興味を示す学生が予想以上に多い。しかし、彼らのほとんどは自国で日本語・日本文化を専攻している学生であり、国際関係についての基礎知識はほとんど持ち合わせていないの

が現状である。これは、自国の国連加盟年を答えられない学生が少なからずいることからよくわかる。

現代日本社会あるいは国際社会に興味はあっても、実際に来日後、日常的に日本の新聞やテレビニュースを見聞きする学生は少数である。さらに、よくよくたずねてみると、自国でも日常的に新聞やニュースを見聞きしていなかった学生がほとんどである。クラスで新聞記事を読んだり、ニュースを見たりしたうえで、ニュース解説を付け加えるような授業を望む声が多い。これは、来日直後の時期に開講する秋学期に限らず、春学期の受講生にも見られる傾向である。こうした傾向が見られるのは、報道は、前後のいきさつが分からないと理解しにくいためであろう。つまり、留学生らは、「最新の情報」を理解するためには、「過去の情報」の蓄積が前提になるというジレンマに遭遇することになる。そこで、授業で現代社会の背景を説明するには、歴史的背景に言及する必要があると出てくるのである。

3. 授業形態

留学生のニーズにできるだけ応えるようにするには、どのような授業形態が効果的だろうか。授業では、受動的な知識の獲得にとどまらず、今後、留学生が自発的に新聞やニュースを見聞きするための動機付けをも目標としている。たとえ授業の中で社会問題を扱ったとしても、社会における実体験に基づいて社会問題を認識しなければ、いわゆるバーチャルな社会、つまり仮想社会の問題にすぎないからである。

ここでは、学期中に複数の授業形態を取り入れることを前提に、一般的に考えられる4種類の授業形態を挙げ、実際にその形態で授業を行った際の問題点なども記述する。

① クラスで設問に発言を求める形態

日々の授業で、一方的な講義にならないようにするために行っている。誰もが答えられる「事実」を述べさせるものから、理解度を把握するために「内容」を問うもの、さらには個人の「意見」を問うものまで、さまざまなレベルの質問が考えられる。単なる「上級日本語」の授業になってしまわないようにするためにも、また、社会的な事象を身近な問題としてとらえ、さらに興味を抱かせるためにも、意見を問うことは欠かせないと思われる。ただし、自主的な発言だけを待っていると、発言者が限られてしまい、話すことよりも書くことが得意な学生はなかなか授業で力を発揮できない。発言回数は、必ずしも日本語会話能力を正確に反映するものではないが、ある程度その学生の自信の度合いを反映しているように思われる。発言の多い学生に、発言の少ない学生が圧倒されてしまうこともある。発言回数の多少は、日本語能力の問題ばかりでなく、個人の性格にもよるため、時には任意に指名して発言機会をできるだけまんべんなく与える配慮が必要である。発言は多いが、文章を書かせると話し言葉と書き言葉の区別がつかず「～じゃないですか」等と書く学生がいる。反対に、発言はほとんどないが、正確な日本語の文章を書く学生もいる。

② あらかじめ課題を与えて後日クラスで発表する形態

この形態は、全員が発表の機会を与えられることを前提としている。つまり、話すことが苦手な学生も参加を余儀なくされるのだが、準備ができるので落ち着いて発表する学生がほとんどである。レジュメだけで発表をする学生もいれば、原稿を書いてきて読み上げる学生もいる。課題はできるだけ大まかなものにして、各学生の独自性が発揮できるようにすると、各自工夫を凝らした発表が期待できる。この形態を試みたのは春学期で、多くの学生が修了論文を抱えていたにも関わらず、非常に多彩な発表を経験した。発表を聞く側もどんな発表になるのか予想がつかないので、毎回の授業が楽しみになるのか、欠席者はほとんどなかった。「人前で話すことが苦手」という苦手意識を持っていた学生が、発表を機に自信を持ち、残りの授業で以前より積極的に発言するようになった例もある。発表者だけがその時間の参加者にならないようにするために、発表後には質疑応答の時間を設けた。また、クラスの人数が多い場合には、全員が質問することは不可能なため、毎回、発表者に対して各自が感想文を書いて渡すようにした。感想文には、必ず、発表のよかった点を書くよう求めた。問題点としては、発表や質疑応答が白熱する余り、1コマで1人の発表をするのが精一杯になってしまうことがある、ということが挙げられる。

③ クラスでの設問に文章で回答する形態

これまで、多くの場合は学期末試験として行った形態である。設問は、与えられた文章の内容把握を確認するもの、与えられた文章からの発展的な想像力を問うもの、独創的な考えを問うものなどがある。あらかじめ課題を与えておいて、各自試験日までに考えをまとめておき、クラスで答案用紙にその考えを書く場合と、試験日当日に課題を与えて回答する場合とがある。いずれの場合も、辞書持ち込み可であるが、思いこみによる誤字などが散見される。例えば「国際関係」の「際」の誤字が多い。また、文法的な誤りは「は」と「が」の使い分けの誤りや、「～したい」「～したがる」「～してほしい」の混同が目立つ。辞書で調べて難しい言葉を使おうとする意欲が感じられるが、時に意味不明な文章も散見される。限られた時間内に答案を書くことは、たとえ上級レベルであっても緊張するのであろう。こうしたことから、レポートにせず、教室で一定の時間内に答案を書かせることには意義があると思われる。さらに、近頃氾濫しているカタカナ語を、多くの学生が「最近の日本語」「生きた日本語」らしさを出すために使用を試みるものの、その使用にはどの学生も苦勞している様子がうかがえる。彼らの考える「平易な英語」を「カタカナ語」にしてみても、日本人には通じないことが多々あるからである。例えばある学生は、店先で売られている「ミネラル・ウォーター」からの類推で、飲食店で「ウォーターをお願いします。」と言ったところ怪訝な顔をされたが、その区別がわからないと言っていた。また、急速に増えているカタカナ語は辞書に載っていないことが多いので、限られた時間内に書く文章に取り入れるのは、難しいようである。

④ あらかじめ課題を与えて後日レポートを提出する形態

学期末試験の代わり、あるいは学期途中で提出する課題として行うことが多い。最近では、インターネットで簡単に多くの情報が得られるので、単に何かについて調べるという「調査型」の課題は無意味だと思われる。簡単に見栄えのする提出物ができあがるので、インターネット情報をそのまま印刷して見直すことなく提出する学生もいる。例えば、自分の国について

て調べる課題を出すと、多くの学生が、日本語サイトの各国情報を印刷してくる。その結果、「自国」について調べているはずなのに、文中「我が国（日本のこと）に対する輸出」という記述がそのままになっていたりする。これは②の発表の際に、発表者がクラスに配布する資料でも経験されることである。これは、学生の責任ばかりでなく、安易な設問を設定した側にも責任があるであろう。あらかじめ課題を与える場合、正解はなくても、調べながら考えざるを得ない「調査型+小論文型」がいいと思われる。時間に余裕がある分、設問は③よりも自由度の高いものになる。

以上、授業形態をおおまかに4種類挙げた。

まずは、簡単な質問を繰り返すことで事象を正確に把握する。上級レベルの学生は、ある程度日本語能力に自信があるだけに、かえってなんとなく雰囲気全体を把握していることが意外と多い。細かい事実関係を改めて問うてみると、曖昧理解のままになっている部分や、思いこみによる事実誤認などが案外多いものである。そうした点を正確な理解に置き換えたうえで、発展的な内容を取り上げたり、各自の意見を述べたりすることが望ましい。いずれの授業形態をとるにしても、短い設問に対して自由に答えられるようにすればするほど、学生の独創性が発揮される。また、深く考えることで新たな興味もわいてくる。上級レベルの学生のニーズは単なる日本語の正誤にとどまらないことを考えると、ある程度このような授業形態の組み合わせは必要だと思われる。

最後に、上記4種類の授業形態とは別に、グループでの共同作業について短く触れることにする。

上級レベルの学生は、Jコースの学生がほとんどなので履修する科目の自由度が高い。従って、クラスを離れると共同作業を行うのは難しく、クラス内でできる共同作業が望ましい。クラス全員の前での発表とは違って、小規模グループに分かれて行う作業は、数人での話し合いなので、話すことが苦手という学生も比較的積極的に参加できる。また、それまであまり話したことのなかった学生同士が、作業を機に相互理解を深める例もある。

1コマで作業を完了できないような課題は、グループ全員がそろわないと作業を進められず、限られた授業数では取り入れるのが難しい。1コマで完結する作業であれば、クラスの雰囲気作りなどの副効果もあり、積極的に取り入れたい授業形態である。

4. 教材

では、こうした授業形態はどのような教材を用いて実践してきたのか。これまでのところでは、ほとんどの場合、テレビニュースや新聞などマスコミを利用して授業を行ってきた。以下にそれらを具体的に記すこととする。

① テレビニュース

NHK 週間子どもニュース (毎週土曜 18:10-18:40。NHK 総合)

番組冒頭で、国内外の一週間のニュースを短くまとめている。また、その週の特に重要な問題を一つ取り上げて、詳しく解説している。子供向けなので、語句の説明にとどまらず、経緯などにも触れており、大変わかりやすい。ただし、用語がかみ砕かれすぎているので、上級レベルの学生には「新聞レベル」の用語に置き換えて解説を加える必要がある。

NHK 手話ニュース (月曜-金曜 13:00-13:05。NHK 教育)

昼間のニュースで、夜のニュース (月曜-金曜 20:45-21:00。NHK 教育) より短い。字幕 (ふりがな付き) があるので、正確な理解の助けとなる。また、字幕は最小限の表現方法になっているので、聞こえてくるニュース原稿とは異なる。書き言葉と話し言葉の区別を学習するにも適している。

【例】2003年5月15日放送分。資料1 (字幕を全文ワープロ打ちしたもの) 参照。

NHK 週間手話ニュース (毎週土曜 11:45-12:00。NHK 教育)

一週間の内外のニュースが15分間にまとめられている。地域の伝統行事の紹介などもあり、内容にメリハリがある。

② 新聞

1回で読み切れる分量の囲み記事を用いることが多い。

一般記事を用いる場合は、数紙を読み比べることがある。同じ内容でも新聞社によって扱いが異なるので、それぞれの新聞社の視点がわかる。内容の正確な把握の練習にもなると思われる。

【例】2003年6月20日1面記事。資料2参照。

読売新聞 「子どものニュース ウィークリー」 (毎週土曜夕刊)

ひとつの事柄について詳しくわかりやすく解説している。ふりがな付きなので漢字が苦手な学生にはいいが、ひらがな交じりのいわゆる交ぜ書きの熟語 (かん視「監視」など) はかえって読みづらいと留学生には不評な場合もある。NHK 週間子どもニュースと同じく、上級レベルの学生に対しては用語の言い換えが必要となる。

【例】2003年4月5日掲載分。資料3。

読売新聞 「新 日本語の現場」 (夕刊連載コラム)

日本語をめぐる諸問題の連載。基本的に毎回読み切り型である。カタカナ語などは何回かにわたって取り上げられ、言葉そのものの問題にとどまらず、社会背景などにも言及している。これを題材にして発展的な解説を加えることを前提とすれば、ちょうど良い分量だと思われる。

【例】2002年11月22日掲載分。資料4参照。

③ 関連書物

日常的に大量に流れていくニュースや新聞などの情報だけでなく、書物として残る情報も必要

である。書物を紹介する際にも、複数の新聞の書評欄などを参考にして実際に読んだ上で、できるだけ新しいものを紹介している。新しいものは評価が定まらないという欠点があるが、評価の定まった書物に関しては、別の機会に接する可能性が高いと思われるので、あえて新しいものを選んでいく。また、日本の流行を知る上でも、ベストセラーなどに対する留学生の興味は深いと思われる。授業では、専門書ではなくできるだけ読みやすい一般書を紹介することで、興味の対象を広げることを目的としている。

ここでは、これまでに実際に授業で利用した、日本事情の理解に役立つと思われる辞書類と、一般書を列挙する。

『ニュースの中のカタカナ用語 ズバリ！日本語で言えますか？』日文新書（2001）

『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』三省堂（2002）

『岩波 日本語使い方考え方辞典』岩波書店（2003）

原康『国際関係がわかる本』岩波ジュニア新書（1999）

緒方貞子『私の仕事』草思社（2002）

アレックス・カー『犬と鬼』講談社（2002）

ドナルド・キーン『果てしなく美しい日本』講談社学術文庫（2002）

選書メチエ編集部『ニッポンは面白いか』講談社（2003）

なお、『犬と鬼』⁽¹⁾『果てしなく美しい日本』『ニッポンは面白いか』は、いずれも外国人著者によるものであるが、著者本人による日本語である。翻訳書物は原則として授業では利用していない。

5. 問題点

① 時間的制約

授業は、半年で1学期が完結する。半年という期間の中で、さらに選択授業ならではの制約がある。つまり、履修届を提出してクラスが固定するまでの授業3回、学期末試験1回、試験後（つまり成績が出た後）出席者が減ってしまう1～2回を除くと、完全な授業として成り立つのは、実質的に10回ほどしかない、ということである。特に春学期は、テスト後夏休みを挟むことや、9月から自国での授業が始まるために帰国してしまう学生がいること等もあって、試験後の9月の出席者はごくわずかである。

毎回、基礎的な知識の不足を補いながら、取り上げた題材の経緯や語句説明などを行うとなると、どうしても広く浅い授業になってしまう。興味の対象を広げるという目的はある程度達成できるとは思われるが、10回ほどの授業回数では、どこまで授業での知識が浸透したかは心許ない気がする。

② 留学生の興味の多様性

大阪外国語大学留学生日本語教育センター『授業研究』創刊号で述べられているように、「同

じ日研究生の中にも、日本語・日本文化の研究を続け、将来は教育に携わることを希望する研究志望タイプの学生もいれば、実務的な日本語能力や技能を身につけ、将来の仕事に役立つ知識や経験を留学に期待する研修志望タイプの学生もいる。留学の目的や目標が未だ明確に自覚できていない学生もいる」⁽²⁾ というのが実状である。

また、出身国によって受けてきた教育もまちまちである。さらには、出身国の社会体制の違いから、当たり前のこととして通用する前提条件が限られてくる。つまり、最大公約数としてクラスで共有できる部分は非常に小さく、最小公倍数としてクラス全体の興味をカバーする範囲は非常に大きいと言える。

カリキュラム全体としては、学期ごとに多様な授業を用意することで対応できるが、半年間の授業の中で、授業としての一貫性を持たせながら満足度の高い授業を行うことは難しい。

また、同じ年度であっても、秋学期に履修した学生の興味の対象と春学期に履修した学生の興味の対象が全く異なる場合には、同一科目名にもかかわらず授業形態も取り上げる内容も全く違うものとなる。

学生の興味の多様性はすなわち授業内容及び授業形態の多様性を意味している。

③ 日本事情の指し示す内容の曖昧さ

「日本事情」の指し示す内容は漠然としており、仮に、現在日本で起こっている様々な現象とするならば、範囲は広大で非常に曖昧である。つまり、授業担当者の裁量権が大きいのが現状である。学生の興味が多様化し、社会が複雑化する中で、さまざまなニュースを取り上げた上で解説するとすると、国内の政治経済社会のみならず、国際関係、科学などの知識も必要となる。

また、授業担当者の明確なメッセージがなければ、科目としてのまとまりがなくなってしまうのが、難しい点である。

まとめ

以上、おおまかではあるが、これまで行ってきた授業形態や教材をもとに上級日本事情の授業について述べた。授業では、一見難しいと思われる政治・経済・国際関係などの問題を身近な問題としてとらえ直し、できるだけ学生の興味の対象を広げることを目的としている。この授業の履修後、彼らが日常生活の一部に、朝新聞を読むことや夜ニュースを見ることなどを取り入れてくれば幸いである。

日本事情は、決して日本だけの事情であってはならない。老若男女、日本人・外国人を問わず、様々な目から見た日本事情がある。留学生の目に映る日本事情も、私たち日本人から見える日本事情も、実は事実の一部にすぎない。今後は、この点に留意しながら授業を進めていくことを考えている。

手っ取り早くインターネットなどで膨大な情報を収集出来ると、何でもわかったような気になるが、情報というのは知識の積み重ねと取捨選択という作業を経なければ、何の意味もなさない。学生には、受動的に情報を鵜呑みにすることの危険性を知り、手間を惜しまず能動的に考える習慣をつけてもらいたいと思っている。

学生によく問う質問がある。「あなたの国ではどうですか?」というものである。日本社会のいろいろな面を知ることは、各自が自国の状況を振り返ることにもつながるからだ。即答できる場合もあれば、そんなことは考えたこともなかったと言う場合もある。彼らは、若くして日本から自国を眺める機会に恵まれた留学生たちである。将来に向けて、広い視野でさまざまな事柄に興味を持ってほしいものである。

注

- (1) 本著作は、著者本人による英語版も出ている。Kerr, Alex., *Dogs and Demons The Fall of Modern Japan*, Penguin Books, London, 2001.
- (2) 平尾得子「大阪外国語大学留学生日本語教育センターにおける日本語・日本文化教育カリキュラムの開発」大阪外国語大学留学生日本語教育センター『授業研究』創刊号(2003) p.17

(はりま りょうこ 本センター非常勤講師)

<資料1>

日本事情 2003年5月16日

NHK 手話ニュース (5月15日放送分)

【米韓首脳会談 米「軍事的な選択肢排除せず」】

米のブッシュ大統領は韓国のノ・ムヒョン大統領と会談した。

北朝鮮が核兵器保有を認めた事態でどう対処するかをめぐり意見交換。

その後共同声明を発表した。

両首脳：北朝鮮が核保有と使用済み核燃料の再処理認めたことに懸念示した。

緊張高める行動は国際社会から一層の孤立を招くだけと警告。

「核開発計画を検証可能な形で完全に放棄するよう、平和的手段を通じて北朝鮮に迫っていく。」

会談後、共同記者会見でノ・ムヒョン大統領は「多くの争点について合意を得た。何よりもブッシュ大統領と信頼関係を築いた」と会談の意義を強調。

これに対しブッシュ大統領は「北朝鮮の核開発問題平和的解決への努力をノ・ムヒョン大統領に約束した。」

しかしブッシュ政権は「軍事的選択肢を排除しない」との立場を崩さず。

【米韓首脳の共同声明 福田官房長官が会見】

「北朝鮮がこのメッセージを真摯に受け止め、事態をさらにエスカレートさせないように改めて求めたい。」

米側が軍事的選択肢を排除しない立場崩さないことについて「いろいろな意見はあるが平和的話し合いで解決する。」

【新型肺炎の感染地域 WHOが中国の5省加える】

カナダのトロントは新患者なくリストから除く。

世界全体で患者・疑い・・・7628人。死亡した人・・・587人。

【連続爆弾テロ事件にサウジアラビア人15人が関与】

サウド外相「米捜査機関とも連携、事件の全容解明に全力をあげる」

理解逆さま

◆慣用語の理解度◆	
慣用語	正解率%
流れに棹さず	12.4
確信犯	16.4
閑話休題	23.8
話をわざわざ木筋に戻す時に川に	27.6
多いため。多い理由は木筋から	44.6
わざとに直す時に川に	62.8
役不足	27.6
気が配れない	44.6
相手が振り回されたりしない	62.8
得意でやらかす	49.9
多く配られて他と違って感心ない	98.5
得意でやらかす	91.1
得意でやらかす	91.1

特定慣用語

「流れに棹さず」や「役不足」という慣用語を国語の6割が逆の意味で理解していることが19日、文化庁が発表した昨年度の「国語に関する世論調査」で分かった。また6割が「逆さまに感じる」と感じていた。

調査は昨年11月12日にかけて全国の16歳以上の男女3,000人を対象に面接方式で実施した。回収率は73.9%。八つの慣用語を選んだ意味を聞いたところ、「流れに棹さず」(時流に乗って物事が進展する)を正確に答えたのは12.4%。83.6%が「逆向きの行為」と逆の意味で理解していた。「役不足」(能力・力量が比べて役目が軽すぎる)の正答率は27.6%で、62.8%が「能力・力量に比べて役目が重すぎる」と逆の意味を回答した。

また「確信犯」(政治・宗教上の信念に基づいて行為・犯罪)も「悪いこと」と分かっていないなどの行為・犯罪という誤解が57.6%上った。

言葉の混同は「非慣用語」が24.4%、「逆さま」が56%で、全体の80.4%が「流れ」を感じていた。85.8%だった99年度調査と比べると、5.4%下がった。【横井信彦】

調査は昨年11月12日にかけて全国の16歳以上の男女3,000人を対象に面接方式で実施した。回収率は73.9%。八つの慣用語を選んだ意味を聞いたところ、「流れに棹さず」(時流に乗って物事が進展する)を正確に答えたのは12.4%。83.6%が「逆向きの行為」と逆の意味で理解していた。「役不足」(能力・力量が比べて役目が軽すぎる)の正答率は27.6%で、62.8%が「能力・力量に比べて役目が重すぎる」と逆の意味を回答した。

調査は昨年11月12日にかけて全国の16歳以上の男女3,000人を対象に面接方式で実施した。回収率は73.9%。八つの慣用語を選んだ意味を聞いたところ、「流れに棹さず」(時流に乗って物事が進展する)を正確に答えたのは12.4%。83.6%が「逆向きの行為」と逆の意味で理解していた。「役不足」(能力・力量が比べて役目が軽すぎる)の正答率は27.6%で、62.8%が「能力・力量に比べて役目が重すぎる」と逆の意味を回答した。

流れに棹さず 役不足

読書新聞

「お会計のほう」100円からお預かり

「お会計のほう」一万円に、全国の十六歳以上の男女三千人を対象に行い、若者を中心に「お会計のほう」を「お預かり」に広げている。調査によると、エンストープなどでよく聞かれる「お会計のほう」を「お預かり」という人が、去年の調査で39.9%増え、今年、59.9%に達した。文化庁は「お会計のほう」の誤解が増えていると、調査の結果を踏まえ、今年、お会計のほうの誤解を助長している人が多くなった。調査は昨年十一月、調査は昨年十一月

気になる人急増

「お会計のほう」一万円に、全国の十六歳以上の男女三千人を対象に行い、若者を中心に「お会計のほう」を「お預かり」に広げている。調査によると、エンストープなどでよく聞かれる「お会計のほう」を「お預かり」という人が、去年の調査で39.9%増え、今年、59.9%に達した。文化庁は「お会計のほう」の誤解が増えていると、調査の結果を踏まえ、今年、お会計のほうの誤解を助長している人が多くなった。調査は昨年十一月

役不足↓役目重い

「お会計のほう」一万円に、全国の十六歳以上の男女三千人を対象に行い、若者を中心に「お会計のほう」を「お預かり」に広げている。調査によると、エンストープなどでよく聞かれる「お会計のほう」を「お預かり」という人が、去年の調査で39.9%増え、今年、59.9%に達した。文化庁は「お会計のほう」の誤解が増えていると、調査の結果を踏まえ、今年、お会計のほうの誤解を助長している人が多くなった。調査は昨年十一月

流れに棹さずの誤解

「流れに棹さず」の慣用語(時流に乗って物事が進展する)を正確に答えたのは12.4%。83.6%が「逆向きの行為」と逆の意味で理解していた。「役不足」(能力・力量が比べて役目が軽すぎる)の正答率は27.6%で、62.8%が「能力・力量に比べて役目が重すぎる」と逆の意味を回答した。

誤「逆らうこと」…64%

正「勢いに乗る」…12%

「逆らうこと」の誤解は64%、「勢いに乗る」の正解は12%。調査は昨年十一月、調査は昨年十一月

新 日本語の現場

105

一九八九年と九七年、当時

の小泉純一郎厚相の呼びかけ

で発足した旧厚生省の「用語

適正化委員会」ではまず、省

内のカタカナ語を総点検し

た。「ソーシャルコスト」↓

「社会的費用」「コンセプト」

↓「基本的考え方」などのほ

か、新鮮なイメージを狙った

施策名の言い換えも進めた。

年金相談を電話で受ける「年

金アンサー」は「年金電話番」

う具合。

「分からなければ（政策を

例えは、「フリーライゼー

例えを断念した経緯がある。

いま世界の潮流は

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

言葉は生き物 困惑も

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

四年ごろ、福祉関係者が紹

介。当時は「正常化」「常態

化」などと訳されたが普及し

なかった。委員会でも、「共

生社会」など様々な訳語が考

えられたが、日本語でびたり

とくる言葉がなく、結局言い

換えを断念した経緯がある。

いま世界の潮流は

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

「フリーライゼーシ

〒100・8055 読売新聞東京本社「新日本語企画班」
FAX 03・3217・1679 t-nihongo@yomiuri.com

2004年

4月5日(土曜日)

新聞 読者 刊

(第三種郵便物認可)

今日、「郵政事業法」といふ国の法令がなくなり、「日本郵政公社」が生まれました。公社は、田が全額を出資して、株式会社の中間的な組織です。手紙やはがきを配達する「郵便」、お金をあずかって利息をつけて返す「郵便貯金」、お金を積み立て、病気や事故の時に保険がもらえる「郵便保険」の三つが仕事です。郵政公社は、国の仕事を担い、またな部分を減らす行政改革の中で考えられ、民間のようサービス力を入れています。

一長い歴史

日本の郵便の仕組は、今から百三十五年前の1871年明治四年に生まれました。作られたのは郵便と、この入で、キリストの仕組を基本にしました。それまでは、手紙や品物を運ぶことを仕事にして「飛脚」に費用を払って運んでもらっていました。だが、田が責任を持って配達する仕組を作ったので、キリストのシステム(Station)を持ち込み、「切符手形」を初めて「切手」と名付けました。初めは、東京、京都、大阪という大きな都市の間だけでしたが、じだいに全国に広がりました。七年、郵便の仕事は国だけの仕事になり、料金も国同じになりました。八五年には、郵便の仕事を担当する「郵便局」という役所ができました。手紙をはかばかしく、「信」は手紙のこと、「逓信」は国番に通信を取り次ぐという意味です。郵便局のマークは「〒」のマークは、「マイン」の「コ」の字を図案化したものです。七五年(明治八年)に郵便貯金一九一六年(大正五年)に郵便保険も始まり、「郵便事業」と呼ばれる大きな三つの仕事が始まりました。通信省は四年(昭和十四年)に郵政省と名前が変わり、二〇〇一年には国の役所を整理する「高

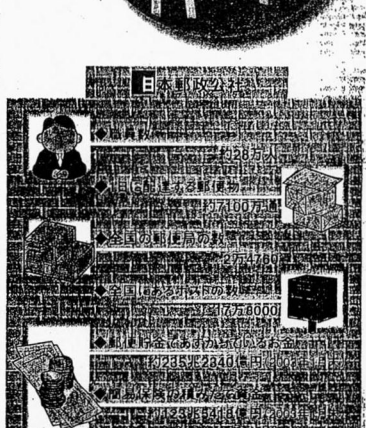
日本郵政公社 国から切り離しむだ減らす



「再編」で「総務省」と「郵政事業法」に分かれました。

一なぜ公社か

長年の仕事だった郵政事業ですが、「いつまでも国がやらなくていいのではなか」という意見がありました。



国が行事業なので、民間の会社にならざるを得ない。郵便の手紙を使ったサービス、パソコン通信や電話が普通になり、サービスも良くなった。取り立てて、たまたまの批判が出ている。批判を届ける郵便の会社も増えた。

便利なサービス充実させた

郵便局でできたんだ。郵便公社ができたんだ。

郵便局でできたんだ。郵便公社ができたんだ。

郵便局でできたんだ。郵便公社ができたんだ。

●イラスト スタジオスパイス (湯浅ひろゆき)

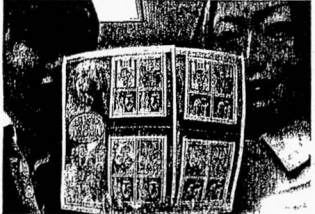
郵便小包と同じサービスを、郵便公社もサービスをする必要にせまれている。手紙や物を届ける仕事を、国が行う必要はない。郵便貯金や郵便保険についても、銀行や信託、保険会社が同じ仕事をしています。行政改革は、民間にできることば民間にまかせ、田の仕事は減らすことで組織をすっきりさせるのが目的です。そのため、一九九七年の政府の話し合いで、民間の会社でもできる郵政事業を田の仕事からは、郵政公社にするこになりました。

一利益あげるため

郵政公社は、田の予算と組織を運ぶための会社として作られます。これまで自由で活動することができず、しかし、民間の会社のように利益をあげなくてはなりません。そこで、できるだけの費用を削減し、もうけを増やそうと、民間会社と同じ経営方法を目指しています。仕事の数を減らすために、有名な自動車会社にのみ、郵便局のむだな作業を減らすことになりました。新しい点を発見し、新しい仕事を生かすための、もう一つが、郵便サービスへの取り組みです。

一いずれ民間に?

郵政公社については、銀行や保険会社から注目が集まっています。郵便貯金があずかっている金は、今年一月末で二百二十五兆円以上、簡易保険の積み立て資産は二十兆円以上にもなります。国内最大の金融グループ「みずほホールディングス」の資産が約四十三兆円、最大の生命保険の日本生命が約四十四兆円ですが、ほかにも多くの資産です。また、田の仕事だった時と同じように、あずかたの金や利子は国が保証し、民間の会社が払わなければならないという税金も免除されたのです。



日本郵政公社では、好きな写真を切手にするサービスも始める。小費目相、いずれは民間会社にする方がいいと考える。郵政公社を将来にするが、専門家に意見を聞いて、郵政公社は生まれはしますが、いまままでのままではなく、仕事の内容が変わった可能性もあります。